

# 発達障害のある児童生徒の自己有用感を育む方策の検討<sup>†</sup>

## —特別支援学校での授業実践を通して—

工藤 智史\*・武田 篤\*\*

秋田県教育庁\*・秋田大学教育文化学部\*\*

近年、発達障害のある児童生徒への指導内容・方法の工夫がより一層求められるようになった。そこで、本研究では特別支援学校の地域資源を活用した発達障害児童生徒の授業づくりの実態を明らかにした上で、発達障害のある児童生徒の自己有用感を育むための方策の一つとして、地域資源を活用した授業に焦点を当て、その具体的方策を明らかにすることとした。その結果、地域資源を活用した授業を通して、感謝される経験を積み重ねることと、体験活動を振り返り、自己の学びと成長を言語化し、それに対して教師が教育的に価値付けることが、生徒の自己有用感を育む上で重要である、ということが明らかとなった。また、生徒の振り返り機会は、生徒の学びと成長を教師自身が把握し、授業を評価・改善できる機会でもあり、教師自身の自己有用感を育むことができる、教師にとっての学びの機会であることが明らかとなった。

**キーワード：**発達障害 自己有用感 知的障害特別支援学校 地域資源を活用した授業

### 1. はじめに

近年、発達障害のある児童生徒への指導内容・方法の工夫がより一層求められるようになった。発達障害のある児童生徒に関して小・中学校では数多くの実践や研究が報告され（平澤，2020等）、最近では高等学校における支援体制による指導の在り方等についても報告されている（竹達ら，2020等）。

このような中で、全国の知的障害特別支援学校にも学習困難、対人関係の不応答行動、不登校等の二次障害を抱えた発達障害のある児童生徒が転入学するようになり、教師は支援や対応に困難を抱えていることが報告されている（熊地ら，2012）。また、発達障害のある児童生徒は、育ちの中で対人関

係や学習場面で失敗経験が多くなりがちで（小林，2019）、適切な支援を受けられないまま育った場合には自尊感情・自己肯定感が十分に育たず、二次障害を示すことが指摘されている（小林，2015）。

このことは、過去に筆頭筆者が勤務した学校でも同様であり、二次障害のある発達障害児童生徒では情緒が安定せず、学校生活や授業において、参加が困難なケースも増えてきている。また、不適切な言動やトラブル後には、個別面談やケース会議がもたれたり、集団での授業への参加が難しいことから個別的な対応が行われたりと、事後対応的な支援や対応に追われてきた。そのため、どのようにして発達障害のある児童生徒の情緒的安定を図り、集団での人間関係を円滑に保持しながら学習活動を展開し、自尊感情や自己肯定感を育てていくか、ということが大きな課題となっていた。

国立教育政策研究所（2015）によれば自尊感情は、自己有用感に裏付けられていることがなにより大切であるとされている。すなわち「他人の役に立った」「他人に喜んでもらえた」等、他者の存在を前提と

2022年12月9日受理

<sup>†</sup>Satoshi KUDO\* and Atsushi TAKEDA\*\*, Study of Strategies to Foster Self-usefulness in Students with Developmental Disorders: Through Classroom Practice at a Special Needs School

\*Akita Prefectural Board of Education

\*\*Faculty of Education and Human Studies, Akita University

表1 調査の質問項目

I 発達障害のある児童生徒の指導について	
1.	発達障害のある児童生徒への指導で、今までどんなところに難しさを感じたか。
II 地域資源を活用した授業づくりについて	
1.	地域資源を活用した授業実践をしたことで、どんな力が育まれたか。
2.	地域資源を活用した授業を計画・実践する際に、知的障害の児童生徒と比べて発達障害のある児童生徒に配慮していることは何か。

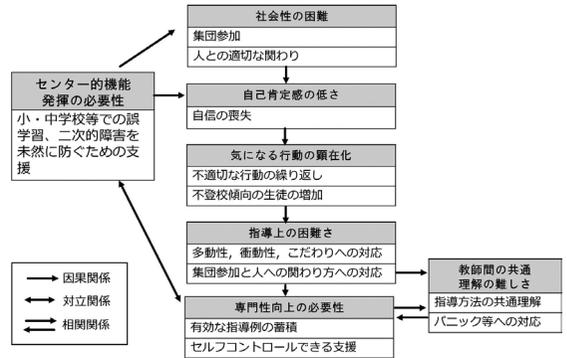


図1 指導の困難さのマッピングとチャート化

表2-1 指導の困難さのストーリーテリング

A特別支援学校に在籍している発達障害のある児童生徒は、集団参加と人との適切な関わり方といった**社会性の困難**を抱えていた。また、その場にそぐわない不適切な言動を繰り返す生徒や不登校傾向の生徒の増加等、自己肯定感の低さに由来する**気になる行動が顕在化**していた。教師は**多動性、衝動性、こだわりへの対応**の他、集団参加や人との適切な関わり方を育むための**指導上の困難さ**を抱えていた。また、教師間での**指導方法やパニック等への対応方法の共通理解に難しさ**を感じており、有効な指導例の蓄積や自分の感情をセルフコントロールできるための支援等の**専門性の向上の必要性**を感じていた。

その一方で、地域の小学校等へは**センター的機能発揮の必要性**を感じており、社会性や自己肯定感の育みを基にした、誤学習や二次的な障害を未然に防ぐための支援の必要性が望まれた。本校に在籍する児童生徒を育み、かつ**センター的機能**を発揮するためにも、発達障害のある児童生徒への支援の専門性の向上が望まれた。

した社会性の基礎となる自己有用感を育てていくことの重要性を指摘している。

本多ら（2019）は、地域資源を活用した授業は生徒の社会性の基礎である自己有用感を育てるための有効な側面を有していることを報告している。しかし、地域資源を活用し、発達障害のある児童生徒の自己有用感を育むための具体的方策に関する研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究では、A特別支援学校の地域資源を活用した発達障害児童生徒の授業づくりの実態を明らかにした上で、学校教育を通して発達障害のある児童生徒の自己有用感を育むための方策の一つとして、地域資源を活用した学習活動に焦点を当て、その具体的方策を明らかにすることとした。

本研究では、自己有用感を国立教育政策研究所（2015）を参考に、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という自分と他者との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的評価と定義する。

II. 研究 I

地域資源を活用した発達障害児童生徒の授業づくりの実態調査

1. 研究の目的

発達障害のある児童生徒の指導上の課題、及び地域資源を活用した授業の成果と課題を明らかにする。

2. 対象と方法

調査はA知的障害特別支援学校の授業を担当している教師51名（小学部15名、中学部16名、高等部20名）を対象とした。

本研究の目的と概要をA特別支援学校校長に説明し許可を得た後、全教師に本研究の目的と概要を説明した。その後、調査用紙を直接持参し各教師へ配付した。記入した調査用紙は各学部を設置した調査用紙回収箱に各教師から投函してもらい、それを調査実施者が直接回収した。

調査は2021年6月14日～7月5日で実施し、回答は45名（88%）であった。

調査は無記名方式の質問紙法で実施し、全て自由記述で行った。質問項目は表1に示したように、発達障害のある児童生徒の指導に関する質問（1項目）と地域資源を活用した授業づくりに関する質問（2項目）とした。アンケートの記述内容の分析は、う

えの式質的分析法に準じて行った。分析の手順は中坪ら（2019）の分析手順を参考に、アンケート記述から得られたメタ情報をマッピング及びチャート化した（図1～3）。また、このマッピングとチャート化に基づいてストーリーテリングを行った。

### 3. 結果

分析の結果を図1・2・3に示し、得られたストーリーテリングの全文を表2-1・2・3に記した。ゴシック太字はメタ情報、下線は情報のユニット化において作成されたカードを示した。

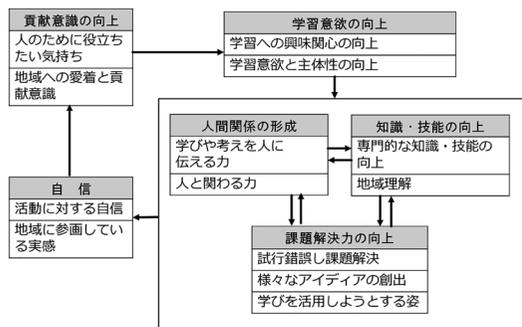


図2 育まれる力のマッピングとチャート化

表2-2 育まれる力のストーリーテリング

地域資源を活用した授業は地域の「本物」の素材を扱ったり、地域での活躍機会があったりするため、児童生徒は学習に興味をもちやすく、**学習意欲が向上**する。その**学習意欲**を基盤とし、校内外の様々な人と関わる中で自分の学びや考えを人に伝える力や人と関わる力といった**人間関係の形成**が図られる。また、地域の専門家から学ぶことで**専門的な知識・技能が向上**したり地域伝統や文化を学ぶことで**地域理解**が促進されたりする。

人との関わりの中で知識・技能を学んだことを基に、**試行錯誤する機会**を設けることで、**様々なアイデアが創出**され、**学びを活用しようとする姿**、すなわち**課題解決力の向上**が育まれる。また、地域資源を活用した授業は地域へ貢献する学習活動を行い、地域の人たちから認められることで、自分に対する**自信**や地域への愛着をもち、**人や地域のために役立ちたい**、という**貢献意識の向上**が育まれる。学習を通して地域に参画しているという実感と地域や人への**貢献意識の向上**が、次の**学習意欲の向上**へとつながっている。

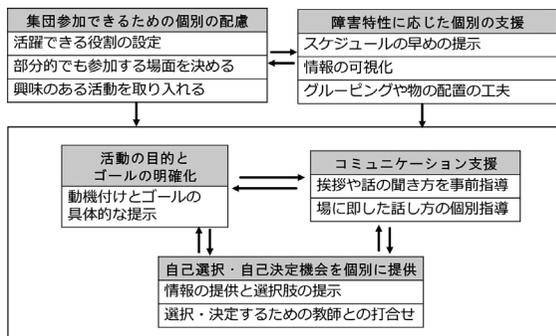


図3 授業で配慮していることのマッピングとチャート化

表2-3 授業で配慮していることのストーリーテリング

活躍できる役割の設定や部分的でも参加する場面を教師と一緒に決める、役割の中でも特に本人の興味のある活動を取り入れる等の**集団参加**できるための**個別の配慮**と、スケジュールの早めの提示や情報の可視化等といった本人が分かりやすい、見通しがもちやすい情報保障、及び他の生徒との相性を考慮した**グルーピング**や刺激の少ない物の**配置**の工夫等の**障害特性に応じた個別の支援**を基本としている。

その上で、活動の目的とゴールを明確化することで、学習の目的意識をもてるようにすること、場に即した話し方の個別指導や、地域の方への挨拶及び話の聞き方の事前指導等といった**コミュニケーション支援**、どの授業や活動だったらどの程度参加できるか、場所はどこが良いか、等の**情報の提供と選択肢を事前に提示**し、教師と個別の打ち合わせることで決める、といった**自己選択・自己決定機会を個別に提供**する等、主に**個別の支援の有効性が**挙げられた。

### ストーリーテリングのまとめ

今回の調査より、発達障害のある児童生徒は、集団参加と人との適切な関わり方といった社会性の困難を抱えていた。また、自己肯定感の低さ由来する気になる行動の顕在化が課題となっており、教師は集団の中でいかに社会性を育てていくのか、といった指導上の難しさを感じていた。また、発達障害のある児童生徒への指導方法に関する共通理解が難しく、有効な指導事例の蓄積等、専門性向上の必要性を感じていることが明らかにされた。

地域資源を活用した授業は、児童生徒の学習意欲やコミュニケーション力、人間関係の形成、知識・技能、課題解決力、自信、地域に貢献しようとする意識を高めることが明らかになった。

地域資源を活用した学習において、知的障害のあ

る児童生徒と比べて発達障害のある児童生徒に配慮していることは、スケジュールの提示や授業における役割設定、参加可能な場面を選択・決定するための教師との個別の打ち合わせ、等の「個別の支援」が主に挙げられた。

#### 4. 考察

今回の調査から、地域資源を活用した学習は児童生徒の学習意欲や自分自身への自信を高めるとともに、地域への貢献意識を向上させることが明らかになった。これは、A特別支援学校の学校教育の重点である「地域に感謝される学校づくりの推進」の下、これまで地域資源を活用し、地域の方と関わり合いながら長年に渡って学習活動に取り組んできた成果であろう。一方で、発達障害のある児童生徒の指導上の難しさとして、集団参加や人との関わり等の社会性の困難が挙げられた。社会性の基礎となる自己有用感、相手の存在なしには形成されない（国立教育政策研究所、2015）ことから、発達障害のある児童生徒の自己有用感を地域資源を活用した授業の中でどのように育んでいけばよいか、指導にあたる教師が難しさを感じていると推察された。

地域資源を活用した授業において、発達障害のある児童生徒へは、「個別の支援」の有効性が挙げられた。佐藤（2021）は、一人一人に応じた徹底した「個別化」がなければ「充実感や達成感、自己肯定感」を感じることができる「深い学び」は実現しないと指摘している。しかし同時に、仲間とともに取り組むからこそ「深い学び」になるとも述べ、仲間とともに同じ目標の実現を目指す「集団化」と「孤立化」ではない多様な「個別化」を追求することの必要性を指摘している。同じく松浦（2019）は、自分を肯定するためには個別の支援だけではなく、集団への支援も必要であると指摘し、個別の支援に加え、集団への支援の重要性を述べている。また、国立教育政策研究所（2015）は「自己有用感」に裏づけられた「自己肯定感」の高まりこそが大切であり、自己有用感とは他者との関係性の中でこそ育まれることを指摘している。以上から、発達障害のある児童生徒が自分と他者（集団や社会）との関係性の中で、いかにして社会性の基礎となる自己有用感を育んでいくことができるか、その具体的方策を検討していくことが、大きな実践課題となる。

### Ⅲ. 研究Ⅱ

#### 地域資源を活用した発達障害のある生徒の自己有用感を育むための実践的検討

##### 1. 研究の目的

地域資源を活用した特別支援学校中学部の生活単元学習において、発達障害のある生徒の自己有用感を育むための具体的な方策について、生徒の変容と教師の受け止めの双方から明らかにする。

##### 2. 対象と方法

- (1) 研究期間は2021年6月～12月で、授業はA特別支援学校中学部〇年生（10名）の地域資源を活用した生活単元学習とした。なお、その授業には小学校からA特別支援学校小学部高学年時に転入学してきた発達障害のある生徒3名が参加していた。また、地域資源を活用した授業を担当した中学部の教師3名を対象とした。
- (2) 筆頭筆者は中学部〇年生の単元検討会（8月、10月）に参画し、生徒の変容を受けて単元計画を授業者と共に協議した。また、地域での活動（8月、10月）に参加し、生徒の行動を記録したり活動終了後に〇年生全員に振り返りの感想を求め、記録したりした。
- (3) 筆頭筆者は中学部〇年生全員に対し、地域資源を活用した授業の振り返り授業を11月に行った。授業中に幾つかの質問項目を設定し、自由発話による意見を求めた。生徒の発話内容は質問項目ごとにKJ法に準じてカテゴリー化し、分析した。
- (4) 12月に対象教師3名に対し、半構造化面接法でインタビューを行い、発話内容はSCAT分析に準じて分析し、理論記述をした。さらに、理論記述をうへの式質的分析法に準じて研究Ⅰと同様に分析した。
- (5) 地域資源を活用した授業の概要

A特別支援学校では、学校と地域が共に育つ活動の実践や地域から感謝される体験を通して、児童生徒の「本物の力」を育てることを教育活動の中心に据えてきた。中でも中学部は、地域のニーズを把握し、地域と目標を共有しながら共に展開する生活単元学習を推進している。2021年度には、中学部のある学年は市が推進している「木育」をテーマに、市と連携しながら市民向けの木のお盆作りワークショップを

開催したり、木の車を製作し市へ贈呈したりする活動を行った。また、別の学年では地域の祭典を盛り上げるためのグッズの製作や、幼児用段ボール滑り台を設計・製作し、寄贈する等、どの学年も年間を通して地域と関わり、地域に貢献する学習を生活単元学習の中心に据えている。

本研究では、中学部〇年生の地域資源を活用した授業である「出張！ウッド・チェンジャーズ～木の魅力で子どもたちと一緒に楽しもう～」の学習を取り上げた。この単元は2020年度からの継続単元であり、C市と共に「木育」を推進し、伝統産業・文化である木の魅力を発信していく学習である。2021年度は、市の生涯学習課から依頼を受けて、市教育委員会主催の「もくもくひろば」にて市民向けに木のお盆作りワークショップを計画・開催し、様々な年代の人と関わった。また、木の車を製作し、地域の遊び場へ寄贈し、幼児たちと交流を図った。単元の授業デザインを表3に示した。

### 3. 結果

#### (1) 地域資源を活用した授業に参加した生徒の振り返り

生徒の振り返りの授業での発言のラベルカードは、全部で38枚で、内容は表4に示したように大きく3つに分類された。

##### 1) 学習を頑張れた理由

この質問で最も多かった理由は「子どもたちのため」であった。知らない人と関わるのが苦手な、集団が大きくなると参加が難しいと話した対象生徒のA児は、小学部と行ったワークショップの他、地域でのワークショップにおいても全て参加することができた。A児からは、「お客さんのために当日は紙やすりでお盆を丁寧に仕上げた。やすりをかけたらみ

んな喜ぶだろうな、と思って」と発話があった。また、木の車の製作に関してC児は、「安全に利用できることを第一に考え、試行錯誤した。木のぬくもりを感じてたくさん楽しんでほしいと思った」等と、他生徒からもワークショップの成功、幼児に木の車で楽しんでほしい、という集団全体の目標達成に向け、自分の役割に意義を感じ、他者（主に子どもたち）のために頑張った、という意見が多く挙げられた。

##### 2) 授業を通じて嬉しかったこと

この質問で最も多かったのは「準備・製作したものを相手が使ってくれているのを見たこと」であった。また、「お客さんに感謝されたこと」、「たくさんの人が参加してくれたこと」といった、生徒たちの取組の結果が、地域の人に使ってもらえる、感謝される等肯定的に認められることに生徒たちは嬉しさを感じていた。これは発達障害のある生徒も同様であった。また、見知らぬ人と接すること、人とうまく関わることが苦手だと話していた対象生徒のB児からは、「右手にギブスをしているお婆さんに優しい対応ができた。ありがとうと言われて心がホッコリした」と発話があった。B児は発話の中で「自分は人を褒めたり話したりするのが苦手、そこを直したいと思っていたけど、地域の人といっぱい話したらできるようになった」と、自分が課題と思っていたことが達成でき、自己の成長を実感できたという喜びの意見も挙げられた。

##### 3) 授業を通して成長したと思うこと

この項目では「コミュニケーション力の向上」「協調性」「自分も他者も肯定的に認められる」「人のために役立ちたい、という気持ちの高まり」といった、社会性や自信の向上、人のために役立ちたいという意識向上等に関する意見が挙げられた。対象生徒は全員、対人関係に課題を感じていたが、対象生徒のA児は「知らない人と一緒に活動できるようになった。普段話さない人とも仲良くできるようになり、協調性が高まった」と発話していた。また、B児は「コミュニケーション力のアップを実感した。最初は緊張しかなかったけど、活動を通して緊張感がなくなってきた、自分からコミュニケーションをとれるようになった。今までは緊張して話せなかった」、C児は「周囲の人とうまく接することができず、授業になかなか参加できなかったが、この授業を通して自分ってうまく関わると気付いたり、人の役に立っている、と思ったりすることが多かった。特



たくさんの感謝の言葉を頂いたワークショップ



ワークショップで製作した木のお盆

表3 中学部〇年生の地域資源を活用した生活単元学習の授業デザイン

単元目標	
(1) 木の性質や道具の使い方が分り、試行錯誤しながら木のお盆や木の車の製作を行う。	
(2) 学んだことを分かりやすくまとめ、校内外の様々な人に発表したり説明したりする。	
(3) 檜や市の伝統産業と深く関わる杉の良さや特徴、利用の意義を知り、木材に対する親しみや木の文化への理解を深める。	
主な活動内容	授業デザインの工夫点
1 市役所職員からワークショップ開催に向けた協力と木の車の製作依頼を受ける	・市の職員からワークショップの開催と幼児用の木の車の「製作依頼」を直接受ける機会の設定
2 木の性質と安全な道具の使い方を覚える	・仲間と同じ目標の実現を目指す、生徒一人一人の役割を示す「任命証」を発行（木育ひろばの方が直接授与）
3 ワークショップに向けて、お盆作りと木の車の試作	・小学部児童と関わり合い、成果と課題を言語化し、改善策を検討する機会の設定
4 小学部生へのワークショップ開催（4回設定）（6・7月） ・木のお盆作りワークショップ ・木の車試乗会	・小学部児童から感謝される機会を設定
5 小学部へのワークショップと試乗会時の改善案の検討	・仲間との協働的な活動（試行錯誤、課題解決機会）の設定
6 もくもくひろばでのワークショップに向けたお盆作りの準備と木の車の製作	
7 もくもくひろばでのワークショップ（8月） ・お盆作りワークショップ開催 ・木の車試乗会	・校内で学んだことを地域で発揮する機会の設定 ・地域の方から評価されたり感謝されたりする機会の設定 ・報道機関への報道依頼
8 木の車の贈呈式と活動報告会（10月）	・地域での体験活動を振り返り、言語化する機会の設定 ・市職員へ直接贈呈し、感謝される機会の設定と、幼児と一緒に木の車で遊ぶ機会の設定
9 振り返り（11月）	・単元全体を通して、自己の学びと成長を振り返り、言語化する機会の設定

表4 生徒の発話内容

n = 38

<b>1 学習を頑張った理由</b> （9枚）
・子どもたちのため（7枚）（*2枚） ・SDGsを実践してもらいたいため（*1） ・使ってもらえると嬉しい（1）
<b>2 地域資源を活用した授業を通じて、嬉しかったことは何か</b> （12）
・準備・製作したものを相手が使ってくれているのを見たこと（6）（*3） ・たくさんの人と話したり、認めてもらえたりしたこと（3）（*2） ・お客さんに感謝されたこと（*2） ・お客さんに優しい対応ができたこと（*1）
<b>3 地域資源を活用した授業を通して、成長したと思うことは何か</b> （17）
・コミュニケーション力の向上（4）（*3） ・協調性（4）（*3） ・自分も他者も肯定的に認められる（*2） ・できることが増え、自信の向上（*2） ・人のために役立ちたい、という気持ちの高まり（*2） ・穏やかな心と余裕（*1） ・臨機応変な対応（*1） ・社会経験の拡大（*1）

\* は発達障害のある生徒の発話ラベルの枚数を示す。

(7枚) (\*2枚)はラベル総数が7枚で、その内分として発達障害のある生徒の発話ラベルが2枚であることを示す。

に小学部との交流やワークショップでは強く思い、もっと学びたいという気持ちが強くなった」「人のためにする活動の良さに気付き、人のためになる仕事に就きたいと思うようになった」等といった発言があった。これらのように、社会性の向上を基にした自己有用感の高まりに関する意見が挙げられた。

## (2) 地域資源を活用した学習についての、対象教師へのインタビューについて

質問は、①地域資源を活用した学習を通して、生徒たちはどう変容したか、②生徒の自己有用感を育むための、地域資源を活用した授業づくりのポイントは何であったか、であった。

「SCAT分析フォーム」を用いて対象教師の発言を基に、対象教師が捉えた生徒の変容の分析過程(一部)を表5に記す。また、SCAT分析で得られた理論記述を基に、うえの式質的分析法で得られた分析の結果を図4・5に示し、ストーリーテリングの全文を表6・1・2に記す。

## (3) ストーリーテリングのまとめ

地域資源を活用した授業を通して、生徒は学習意欲が向上した。また、学習意欲を基盤とし、協調性、コミュニケーション力、人との関わり方といった適切な人間関係の形成の他、情緒の安定といった主に社会性に関わる力や自信の向上が育まれた。

また、仲間や地域から肯定的な評価や感謝されることで、自分と他者(集団や社会)との関係を肯定的に認めるようになり、自分は地域や人のために役立っている、役立っている存在である、役立ちたい、という他者への貢献意識の高まりと共に自己有用感が育まれた。

本研究では地域資源を活用した授業を行う中で、発達障害のある生徒の自己有用感を育む有効な具体的方策として、①学習の動機付け(地域からの期待と依頼、集団の目標の達成に向けた役割分担と価値付け)、②他者との協働的な学習機会(校内外様々

な人と関わり合う機会、仲間との試行錯誤・課題解決機会、互いに評価し認め合う機会)の設定、③他者からのフィードバック機会(他者からの肯定的な評価や感謝される機会)の設定、④体験活動を振り返り、学びや成長を言語化することと、教師からの教育的な価値付け、が有効であることが明らかとなった。また、生徒の振り返り機会は、生徒の学びと成長を教師自身が把握し、授業を評価し改善案を考えられる機会でもあり、生徒の成長を知ることによって教師自身の自己有用感を育むことができる、教師にとっての学びの機会であることが明らかとなった。

今回の授業実践を通して対象教師は大きく3つの視点での意識変容や気付きがあった。第1に、地域資源を活用した授業は他者から認められたり感謝されたりする機会がふんだんに組み込まれていることに気付き、自己有用感を育む絶好の機会であると捉えるようになり、学習活動に意図的に認められたり感謝されたりする経験を組み込むようになった。また、学校生活全体の中で感謝される経験を意図的に設定することが大切であると認識するようになった。第2に、自己有用感を育むためには体験を通して学んだことや成長したこと等を言語化して振り返り、それを教師が教育的に価値付けることが重要であると認識するようになった。その結果、授業づくりのポイントの一つとして「学びの言語化」を取り入れ、単元のまとめで振り返り授業を設定し、授業を通して学んだことや成長したことを言語化する振り返り授業を行うようになった。第3に、授業の振り返りは生徒の学びを把握できるため、教師にとっても授業を評価する場となり、授業の改善案を考える機会にもなると気付くようになった。また、教師自身も生徒の変容を通して、自分自身の自己有用感を育むことができる、教師にとっての学びの機会であると認識するようになった。



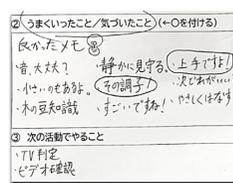
主に2歳児の使用を想定して設計・製作した木の車



幼児との交流



単元のまとめとしての振り返り授業～学びと成長の言語化



小学部児童へのワークショップ後の振り返りメモ

表3 「SCAT分析フォーム」を用いた生徒の変容の分析過程（一部） ～対象教師のインタビューより～

番号	発話者	テキスト
1	A 教師	人によって考え方が違うということに気付けた人が多かったです。人とのやりとりを繰り返したことで、相手の理解が進みました。この人ってこういうのが嫌なんだ、とか、こうやれば喜ぶんだ、とか、この年齢層は、とか。人の気持ちを想像する力がついたと思います。
2	A 教師	振り返り授業後、普段の言動も変わってきました。振り返り授業では、A君は知らない人と話ができるようになった、という自分の成長を話していたけど、具体的には、他学部の手苦しかった児童と話せるようになりました。また、学校から帰る時の送りの時に、「D君の母さんと話したことなかったけど、話してみたら話せたんだよ」とボツンと話していました。それを、自慢げに話していたので、ある程度、それは自分の中で価値のある行動として捉えていたのかな、と思いました。また、人と距離の取り方が上手になったなと思います。べたべたとくっついったりばつと離れたりすることも少なくなりました。さらに、この人怒っているかも、と思うと、教師が「離れて！」という前に自分から離れる等、どうすれば良いか、対処法もいろんな人と関わる中で理解が進んだのかなと思います。それは、地域資源を活用して、狭い人間関係の中から、地域に出て様々な人と関われたからだと思います。
3	A 教師	小学部との学部間交流の中で、「俺、力ついてきている、これ外でやったらどうなるんだろう」という実感がもてたと思います。C君は発表とか原稿を書いてビデオを撮る時にでも、接した小学部の小さい子が来てくれて、すごく嬉しかったんです、と話していました。自分は小さい子どもと関わるのに苦手意識をもっていたけど、こうやって接すれば分かってくれる、こうやれば喜んでくれるんだ、じゃあ、外でもやれるかも、等と、生徒たちは学校の中で自信をつけて、地域に出て成功できた、という自信や達成感を感じることができたと思います。
4	B 教師	一言で言うと、対応力がついた、です。予想した展開でない時に、うまく対応できるようになりました。全員を通して思います。こんなはずじゃなかった、という時も、なんとかやり過ぎて、実はあの時こういう気持ちだったんだよ、というふうに、後で教えてくれるようになりました。その時の、その場の全体を見ることができるようになってきました。その全体の流れを、壊さないように、雰囲気壊さないようにその場でうまく対応して、でもやっぱり思うところはあるから、後で教えてくれるようになりました。その場で感情を出さないで後から、というのとはできるようになってきています。余裕が出てきたな、と思います。去年は難しかったんです。いろんな人と関わったことは大きいと思いました。
5	B 教師	地域と関わって、保護者もワークショップに来てくれました。保護者もうちの子は地域で活躍してすごいな、と思う機会になったと思います。母親も家で褒めているそうです。生徒たちはまだまだ親の評価は大事で、その評価が上がって、家で母さんにこういうふうに通ってもらった、ばあちゃんが凄いな、と言ってくれた、とかB君やC君は話すことが多くなりました。そこが満たされることが必要な子どもたちだなと思います。そういう意味でも、お母さんたちが本当の意味で、自分の子どもたちは凄いな、と思えるような活動でした。地域と関わる活動って、いっぱいテレビや新聞で報道される、っていうことは、そういう意味のある活動だったな、と思いました。ワークショップの時に、親は凄いな、凄いな、と見てくれていました。地域に出ているいろんな人と関わって、広い世界でやっていくけど、まだ親に認められることが自己有用感を上げる要因としてはあの子たちには大きいんだな、と思いました。

## ストーリーライン（現時点で言えること）

- ・生徒たちは、校内外様々な人との関わり合いを通して、一人一人が多様な考えをもっていることに気付くようになり、相手の気持ちを推測し、適切な人間関係の形成を図ろうとするようになってきた。また、生徒自身、自己の成長を実感し、活動に対して自信と達成感をもつことができた。
- ・体験したことを振り返り、学んだことを言語化することで、生徒たちはコミュニケーション力が向上した。人と関わることに自信をもち、自分の成長を実感するようになった。
- ・状況を見て判断し、その状況に応じた行動力と判断力の向上と、心にゆとりをもって自主的に行動できる力が向上した。嫌なことがあってもうまくやり過ごし、他者と折り合いをつけながら、感じたことを後で教師に言葉で伝えるようになり、感情をコントロールできるようになった。単元を通じて校内外の様々な人と直接関わり合う中で、地域の人や保護者等、様々な人から活動に対して肯定的な評価をいただいたり、テレビや新聞等で報道していただいたりしたことで、生徒たちの自己有用感が育まれた。
- ・地域資源を活用した授業を通して、校内での学習成果を地域での活動に活用することと様々な人から肯定的な評価をいただくことで、生徒の活動に対する自信と達成感を育むことができた。

〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念〈前後や全体の文脈を考慮して〉	〈5〉疑問・課題
人によって考え方が違うことに気づけた/人とのやりとりを繰り返したことで、相手の理解が進んだ/人の気持ちを想像する力	人それぞれの多様な思考/関わりを通して他者の気持ちの推察	自他の思考の違いへの気付き/他者の気持ちの気付き	一人一人が多様な考えをもっていることへの気付き	人それぞれが多様な考えをもっている、という気付きに至るプロセスとは
振り返り授業後、普段の言動も変わってきた/知らない人と話ができるようになった/他学部の苦手だった子どもと話せるようになった/自分の中で価値のある行動/距離の取り方が上手になった/教師が離れて、という前自分から離れる等、どうすればよいか、対処法もあるんな人と関わる中で理解が進んだ/地域資源を活用して、狭い人間関係の中から、地域に出て様々な人と関われたから	活動の振り返りによる言動の変容/人との関わりが変容/自己の成長を実感/適切な人間関係スキルの習得/校内外の人との関わり合いの成果	体験活動における学びの言語化による自己認知の変容/校内外様々な人との関わりによる、適切な人間関係の形成	校内外様々な人との関わり合い/体験活動の振り返り/学びを言語化/自身の成長を実感/自分と他者とを肯定的に認める/人と関わることに自信/コミュニケーション力の育成/適切な人間関係の形成	
学校の中で自信をつけて、地域に出て成功できた、という自信や達成感を感じることができた	校内での成功経験を踏まえた上での地域での活動による自負心と充足感の形成	地域資源を活用した学習の意義/自己の成長を実感/他者からの肯定的評価	地域資源を活用した授業/校内での学習成果を活用した地域での学習活動の展開/活動に対する自信と達成感/自己肯定的評価	地域資源を活用した効果的な授業の在り方の先行研究を探る
対応力がついた/予想した展開でない時に、うまく対応できるようになった/後で教えてくれる/その場の全体を見ることができるようになってきた/余裕が出てきた。去年は難しかった。いろんな人と関わったことは大きかった	事態に応じて素早く行動する力の向上/予測不可時の対応力が向上/心境のカミングアウト/俯瞰的視点/心のゆとり/校内外の人とのやりとりをしたことの結果	場に即した行動/気持ちの伝達/場の状況把握・判断力の向上/情緒の安定/コミュニケーション力の向上	状況に応じた行動を判断し自主的に行う/コミュニケーション力の向上/感じたことを後で教師に言葉で伝える/心のゆとり/折り合い/校内外の様々な人と直接関わり合う機会	状況を判断し行動できるようになる背景には、何があったのか
保護者もうちの子は地域で活躍してすごいな、と思う機会になった/親の評価は大事/地域と関わる活動って、いっぱいテレビや新聞で報道される、っていうことは、そういう意味のある活動だったな、と思った/親に認められることが自己肯定感を上げる要因	親からの肯定的評価の機会とその重要性/マスメディアからも注目される活動/親からの賞賛は気持ちの安定と積極的な行動につながる	様々な人からの注目や賞賛による活動への価値付け/地域資源を活用した学習に関わる評価と自己肯定感の高まりの関係	様々な人からの活動に対する肯定的な評価/自己肯定感の育み	

## 理論記述

- 一人一人が多様な考えをもっていることへの気付き、また相手の気持ちを推測し、自分と相手の気持ちに折り合いをつけて関わるようになった。
- 生徒たちは人と関わることに自信をもつようになり、コミュニケーション力の育成が図られた。
- 多様な人との関わりの中で、人との関わり方や学校で学んだことを活用する力が育まれた。
- 心にゆとりをもてるようになり、状況に応じた行動を自主的に行うようになった。
- 嫌なことがあってもうまくやり過ごし、感じたことを後で教師に言葉で伝えることで、感情をコントロールできるようになった。
- 校内外の様々な人から活動に対して肯定的な評価をいただき、自分を肯定的に振り返るようになった。
- 地域から依頼と感謝されることで、自分たちは地域のために役立っていると実感（自己有用感）をもち、活動に対する自信とやりがいを感じるようになった。
- 生徒は学びを言語化することで、他者との関わりにおいて自身の成長を実感し、自分と他者とを肯定的に認めるようになった。
- 様々な人に感謝されたり報道で取り上げていただいたりすることは、自分たちの活動は価値ある活動だと気付くきっかけとなり、自分たちの活動に自負心をもつようになる。その結果、生徒たちは自分たちは地域に役立っていると実感し、自己有用感を育むことができた。

## さらに追及すべき点・課題

- 人それぞれが多様な考えをもっている、という気付きに至るプロセスとは
- 地域資源を活用した効果的な授業の在り方の先行研究を探る
- 状況を判断し行動できるようになる背景には、何があったのか

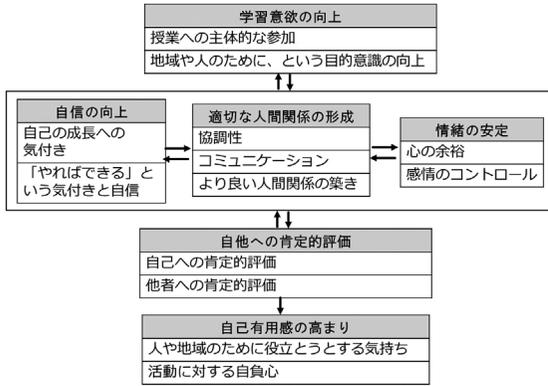


図4 生徒の変容のマッピングとチャート化

表6-1 生徒の変容のストーリーテリング

地域資源を活用した学習を行うことで学習意欲が向上し、地域や人のために、という目的意識をもって授業へ主体的に参加するようになった。生徒は学習意欲の向上を基盤とし、自分の役割を果たすようになり、仲間から認められ、自信が向上した。対象教師は「役割を通して仲間へ手伝って、と依頼するようになり、手伝ってくれたことに対してありがとう、と感謝の言葉を掛けるようになった。そこからより良い人間関係が築かれた」と発話していた。役割を通して仲間と関わり合い、互いの良さを知ったり認め合ったりしたことで、協調性やコミュニケーション力が図られ、適切な人間関係の形成が図られた。

また、適切な人間関係の形成が図られたことと活動に対する自信が向上したことで、心に余裕をもてるようになり、自分の気持ちを表現することで感情をコントロールすることができ、情緒の安定が図られた。対象教師は、「たくさんの人から認められ注目されたことで自信が向上し、自分の得意なことを認識したり苦手なところを受け入れたりした。また、他者の良さを認めるようになった」と発話していた。

これらのことから、校内外様々な人から認められることで、自分を肯定的に評価するようになり、また、生徒は学びを言語化したり活動を評価し合ったりすることで、仲間との関わりの中で自他の成長を実感し、他者を肯定的に評価するようになった。人に期待され、認められたり感謝されたりする経験を積み重ねることで、自分たちの活動に価値を見出し、自負心をもったり人や地域のために役立つという気持ちが高まったりと、自己有用感が育まれた。

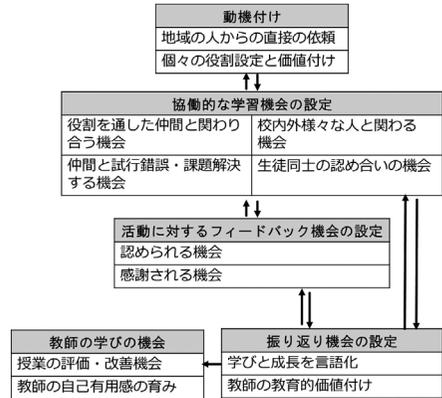


図5 具体的方策のマッピングとチャート化

表6-2 具体的方策のストーリーテリング

単元の導入時において、地域の方から直接依頼を受ける機会の設定や、集団の目標達成に向けた個々の役割設定及びその役割を教師や地域の人価値付けすることは、生徒の学習に対する動機付けとなった。また、対象生徒のC君は授業の振り返りで「実践しては失敗し、そこから次の課題を見つけ、みんなで粘り強く頑張れたことは、自分たちの成長につながった」「地域の子どもにワークショップをする前に、小学部生に行った。校内と地域でたくさん関わり、自分は上手に関われると気付いた」と発話があった。生徒個々が役割を通して仲間と関わり合う中で、試行錯誤や課題解決したり校内外様々な人と関わりあったりする協働的な学習機会は、学びが生まれ、自己の成長に気付く機会となった。また、対象教師全員が語っていたのは活動に対するフィードバック機会としての他者から認められる機会と感謝される機会の設定、及び授業の振り返り機会をもつことの重要性であった。対象教師は「地域の方から感謝の言葉を頂くことで、生徒たちは地域のために役立っている、と感じるようになった」「活動を振り返り、言語化し、教師が価値づけることで自分の成長を実感でき自信につながった」と発話していた。このことから、体験活動に対するフィードバック機会を設定し、生徒自身が自己の学びや成長を振り返り、言語化し、それに教師が教育的な価値づけをすることで、生徒の自己有用感が育まれた。

授業の振り返り機会は「生徒の学びと成長を知るきっかけとなった」「どんな学習活動が生徒の成長に繋がっていたのかを知ることができた」「地域資源を活用した授業は自己有用感を育む絶好の機会であると実感できた」等と対象教師は発話していた。よって、振り返り機会は教師にとっては授業を評価・改善する機会でもあり、また、生徒の成長を実感することで教師自身の自己有用感を育む機会、すなわち教師の学びの機会でもあった。

#### IV. 考察

本研究は、発達障害のある児童生徒の自己有用感を育むための方策の一つとして、地域資源を活用した授業に焦点を当て、その具体的方策を明らかにすることが目的であった。

対象教師は、地域資源を活用した授業は様々な人から評価されたり感謝されたりする機会がふんだんに組み込まれており、生徒の自己有用感を育む絶好の機会であると気づき、具体的方策を検討し、授業実践するようになった。本研究で明らかとなった自己有用感を育む具体的な方策は、地域資源を活用し、地域から期待され、仲間や地域の人との協働的な学習や交流を図ることと、肯定的な評価や感謝される体験を積み重ねること、そして体験活動における振り返りにおいて、自己の学びと成長を言語化し、教師が教育的に価値付けすること、であった。

体験活動を言語化により振り返ることの重要性は、対象生徒の発言からも見て取れる。地域でのワークショップや木の車の贈呈式直後の発話では、B児は「地域のために役立っている感じがする」、C児は「自分って結構できるかも」等の自己有用感の芽生えと捉えられる発言であったのに対し、単元最後の振り返り授業では、A児は「協調性が高まった」、B児は「コミュニケーションのアップを実感した」や「自分の課題であった、人を褒めたり知らない人としゃべったりすることができるようになった」、C児は「小さい子どもと関わるのは苦手だと思っていたが、うまく関われるんだ、と気付いた」、「人のためになる仕事に就きたいと思う」等と他者との関係性の中で自分を肯定的に評価する発言、すなわち自己有用感の高まりを実感している発言へと変容していた。このことから、地域での体験活動や評価・感謝される機会だけでは自己有用感の育みは不十分であり、振り返り機会をもち、自己の学びや成長を言語化することと、教師からの教育的価値付けを重ねていくことで自己有用感が育まれることが明らかになった。

また、対象教師は「振り返り授業後、対象生徒は皆、肯定的な表現が増え、人との関わりが変容した。人の役に立つことに喜びを感じるようになった」と振り返りの重要性と生徒の変容を述べていた。寺沢ら(2009)は、過去の行為でどのような学びがあったかを反芻し、言語化することで思考が活性化され、再利用可能な知識となる、と述べている。この

ことから、対象生徒は自らもまだ十分に知覚できていなかった自己の学びや成長を言語化することで知覚し、教師が肯定的に言葉を補い、分かりやすい言葉で価値付けしたことで、自らの学びを整理し、成長を実感し、行動の変容にまで結びつけられたと考えられる。

また、生徒の振り返りは教師にとっても学びの機会であった。教師は生徒の言葉を聞き、生徒の学びと成長を把握することで授業を評価することができる。振り返り機会は、生徒の学びや成長を通じて教師自身も自己有用感を育み、成長できる機会でもあった。

本研究を通して、対象教師は「自己有用感」という概念を意識することで、地域資源を活用した授業には自己有用感を育む絶好の機会が組み込まれていることに気づき、発達障害のある生徒の自己有用感を育む授業を実践することができた。A特別支援学校では、「地域に感謝される学校づくりの推進」の下、これまで地域資源を活用し、地域の方と関わり合いながら学習活動に取り組んできたが、発達障害のある生徒への指導を通して地域資源を活用する授業の意義を再評価することができた。

対象教師は「単元最後の振り返り授業は授業担当者以外の教師が行うことで、生徒は自分が学んだこと、考えたことを伝えよう、という気持ちが高まっていた」と発話していた。このことは、地域資源を活用した授業の意義や価値を教職員間で共有し、連携しながら授業づくりに教師一人一人が参画していく体制づくりを構築していくことの重要性を示唆している。

末吉(2020)は自己有用感を高める指導と活動のためには、学校は教育課程を見直し、校内外の様々な人から認められる機会をつくることと、多様な人材を巻き込んだ「チームとしての学校」の実現による学校の機能強化の必要性を述べている。今後は、「自己有用感を育む」という視点から学校教育目標を達成する教育課程の柱の一つとし、地域資源を活用した授業を組織的に展開していくことが必要である。

また、対象教師は振り返り授業において、「生徒が何を学んだか、という視点は今まであまり考えたことはなかった。生徒の振り返りを聞いて、生徒は何を学んだから行動が変容したのか、改めて把握できた」や「生徒の学びや成長を聞き取ることは、自

分たちの授業の振り返りとなった。学習活動の何が有効であったのか、生徒の発話を聞いて把握できた。授業評価や授業改善の視点を得ることができた」と発話していた。すなわち、授業評価及び改善を行う際には、生徒の行動の変容という目に見える視点だけではなく、生徒は何を学んだのか、という視点を取り入れることが大切である、ということに対象教師は気付くことができたと言える。このことから、振り返りの授業を通して教師が気付いたことを基にした、授業評価・改善システムの構築を図ることも、今後の実践課題としていきたい。

## 文 献

- 国立教育政策研究所 (2015) : 「自尊感情」？それとも「自己有用感」？  
[https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf\\_18.pdf](https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf_18.pdf)  
 (Retrieved 2022.1.31)
- 熊地 需・佐藤圭吾・斎藤 孝・武田 篤 (2012) : 特別支援学校に在籍する知的発達に遅れのない発達障害児の現状と課題－全国知的障害特別支援学校のアンケート調査から－秋田大学教育文化学部研究紀要 (教育科学) 67 9-22
- 本多由香・武田 篤 (2019) : 特別支援学校における地域資源を活用した授業の有効性に関する検討～教師と生徒のインタビュー調査から～, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 41 63-68
- 小林正幸 (2019) : 発達障害のある子と不登校－二次障害の視点から, 発達教育2019年12月号, 4-11.
- 小林 真 (2015) : 発達障害のある青年への支援に関する諸問題, 教育心理学年報 第54集.
- 佐藤伸二 (2021) : 各教科等を合わせた指導でこそ実現する「深い学び」, 特別支援教育研究 8月号, 2-7, 東洋館出版社
- 松浦直己 (2019) : 自分を肯定するために－行動の問題を示す子への理解と対応～学級の構造化について①, 特別支援教育研究12月号, 16-17, 東洋館出版社.
- 中坪史典・濱名 潔・淀澤真帆・加藤 望・田島美穂 (2019) : 質的データ分析法としてのSCATとうえの式質的分析法の比較, 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第68 9-18.

- 大谷 尚 (2007) : 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 第54巻 第2号
- 寺沢秀雄・沢田翔太・竹原 諒 (2009) : リフレクション可視化サイトによる学びの再生, 日本デザイン学会第56回研究発表大会概要集B07
- 末吉雄二 (2020) : 自己肯定感・有用感を高めるカリキュラム・マネジメント「社会に開かれた教育課程」の視点から, 学事出版.

## Summary

In recent years, there has been a growing need to devise teaching contents and methods for students with developmental disorders. Therefore, after clarifying the actual situation of creating classes for students with developmental disorders using local resources in special support schools, this study focused on classes using local resources to foster a sense of self-usefulness in students with developmental disorders, and to clarify the specific measures to be taken. The results showed that it is important for students to accumulate experiences of being appreciated through classes using local resources, to reflect on their experiences, to verbalize their own learning and growth, and to have educational value given to it by their teachers to develop their sense of self-usefulness. Furthermore, the opportunity for students to reflect on their experiences was found to enable teachers to understand their students' learning and growth, to evaluate and improve their teaching, and to develop their own sense of self-usefulness.

**Key Words** : special needs school for intellectual disabilities, developmental disorders, self-usefulness, classes utilizing local resources

(Received December 9, 2022)